

防災史的にみた高知市とその周辺 —文献・絵図資料の利用から—

高知大学教育学部 教授

大 脇 保 彦

1. はじめに

かつて、日本都市学会が高知市で開かれた際、あいさつに立たれた横山龍雄高知市長は「高知市はポルダー都市であります。」と高知市の紹介を切り出された。確か、昭和50年、51年と台風による水害が続いてのまもなくの時期もあって、参会者に深い感銘を与えた。「台風は忘れられた頃……」の感のある昨今ではあるが、高知市およびその周辺の立地する自然環境、とくに地形環境を改めて認識することは意味のないことではない。

とはいえ、筆者は文科系の歴史地理学徒の一人にすぎない。従って、このシンポジウムでは、他の先生方と異なった役割が期せられている。その役を果たせるかどうかはともかく、以下、その立場で拙論を試みたい。

筆者は、人類の行為を通じて自然を考えることに関心を持って来た。本稿は、その中でも、記録をフィルターとして知見出来る限りにおいて人間社会の行為を通じて自然を理解するごく素朴な方法の一端を例示するに留まる。

2. 黒田郡と古浦戸湾

古代土佐には黒田郡が存在したが、いわゆる白鳳の大地震の際に陥没し、海中に没したという伝承は、漫画の中にもとりあげられる位、高知県では一般によく知られている。その場所は、須崎湾付近だとか、大方町入野浜前面の海中だとか、諸説にこと欠かない。すでに近世各地にその伝承が流布していたらしく、江戸時代の資料集『南路志』などにも記載をみる。

しかし、白鳳の大地震についての情報源は『日本書紀』であって、天武13年(684)10月14日の条に「(上畧)大きに地震る。(中畧)諸国の郡の官舎及び百姓の倉屋寺塔神社破壊れし類、勝て数ふるべからず。(中畧)時に伊豫温泉、没れて出でず、土佐国の田苑五十余万頃、没れて海と為る。(下畧)」とあり、さらに、11月3日には土佐国司の報告として「大潮高く騰りて海水たゞよふ。是によりて、調運ぶ船、多に放れ失せぬ」が記載されている。海没した具体的場所の記述もなければ、黒田郡という地名の記載もない。

古代土佐国では、土佐、安芸、吾川、幡多四郡に、平安初期頃までに長岡・香美が如わり、九世紀半ばに高岡郡が吾川郡を割いて作られ七郡が形成されたと考えられる。いずれにしても、黒田郡という地名は文献的には記載が知られず、江戸時代になって口碑として伝えられているという記載があるのみである。

現状では「黒田郡」の存在は記録上確かめられないし、ましてやその場所が土佐湾内に求められる理由も口碑以外にはない。恐らく、江戸時代の『土佐国編年紀事略』の著者の中山蔵水の50万頃は50万町にあたるという超過大な誤りと結びつきの想定にすぎないのではと考える。50万頃は寺石正路説の約1,200町歩説が正しい。

とすれば、筆者は、1,200haのうち、まとまった水田が海没ないし、浸水した地域は、浦戸湾奥の可能性とするのが自然と考える。

古く、紀貫之の『土佐日記』時代、浦戸湾奥部が現在より遙かに奥深い入江状態であったことは周知の通りである。国府の外港大津も、主としてその地名から、現高知市大津舟戸付近に一応の想定がなされている。が、いずれにしても明確に具体的にされているわけではない。以下、若干、その浦戸湾奥の海岸線の問題に触れてみたい。

図1は、筆者の想定による浦戸湾奥部における奈良時代の条里地割遺構と条里プランの一部を示したものである¹⁾。これによって、当時の海岸線がどの付近にあったかの傍証にはなるであろう。

図1

A



鏡川流域の条里

B



香長平野の条里

図2は、故島田豊寿博士による浦戸湾奥の干拓の進展を示したものの、図3は、筆者による織豊期の浦戸湾奥の一部の状況を、いずれも、長宗我部地検帳と近代以降も残存する小字名とを同定しつつ想定したもので、これらの説明については、シンポジウムの席上試みることにしたい。

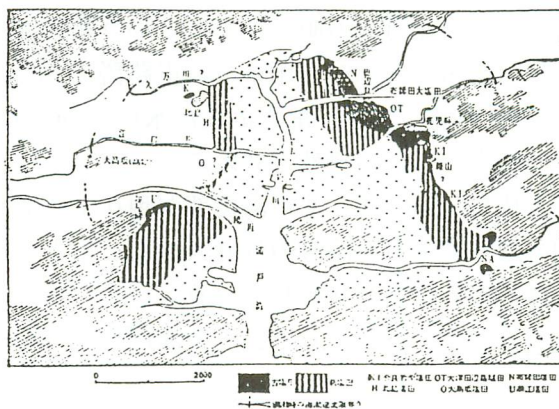


図2 浦戸湾の古干拓



図3 長宗我部地検帳の本田地域の範囲(XYの線)

いずれにしても、白鳳期、奈良時代、平安時代、中世、近世と次第に湾奥部の干拓による縮小化が進展したが、詳細については未検討の部分も多い。

例えば、東部の場合、田辺島以西高須付近までが『地検帳』では、古塩田、新塩田の帳で区別されているが、以東の『大津郷下分』の帳の中でも、条里遺構残存地区より以西は、本田扱いはされるが、「中塩田」「干潟」の記載も多く含まれ、より新しい不安定耕地だったことが知られる。その干拓地進展の具体的時期などの状況については不明である。たゞ、中塩田もさして古い時期でないと想定されることか

ら、平安、中世という長い期間に干拓地化は面的にさして拡大をみなかったこと、地割、その他から不安定耕地であったこと、組織的土事でなかったことなどが推定されるのみである。

このように、湾奥部は干拓地化による縮小化が、とくに織豊期以降組織的（社会的＝政治権力による経営、技術的＝直線的潮留大堤防化など）に進んだが、図4（『高知市総合調査報告書』昭和32年による）に示すように、津波、高潮の際には、古浦戸湾の状況を現出するように水没（冠水化）したことが知られる²⁾。

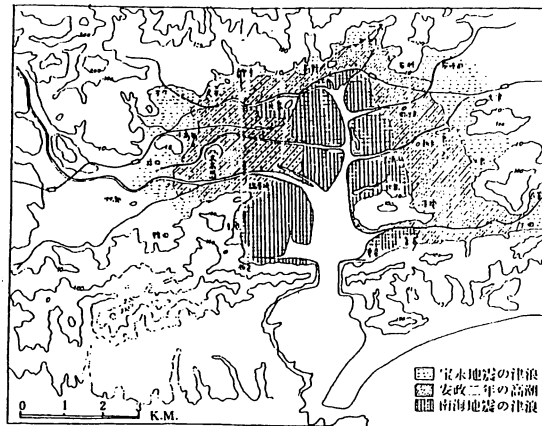


図4

白鳳期の大地震の際も、すでに耕地化し、後退していた海岸線が、一時的に海没化し前進したか、冠水による水没化の可能性などが考えられる。平安から中世にかけての干拓地化の停滞も、社会的、技術条件の他に、鎌倉海進などの自然条件も重ねて考えねばならないであろう。

3. 城下町絵図にみる治水的要素

わが国の都市のうち、最も多いのが城下町に起源をもつもので、それはわが国で生まれた独特の近世都市である。中世的な防御機能に加えて経済的機能も重視されたので、交通の便のよさも立地選定上重視された。従って、舟便の点などからも三角州上に立地する城下町が多い。長宗我部元親が、父祖の地を放棄して、鏡川三角州上に新しい時代にふさわしい城下町建設を試みたのも、正にその典型といえよう。

ところで、世界の歴史時代の都市には囲郭都市が多い。中世ヨーロッパや中国の城壁（市壁）によって囲郭されたものがその例である。城下町の場合、故矢守一彦博士が指摘されたように³⁾、総構え型が基本型で、これも一種の囲郭といえよう。土手や堀川で城下町全体を囲郭したものである。

京都では、お土居跡というものが、歴史的景観として保存されている。これは、秀吉が京の町の大部分を土手で囲郭させ、古代平安京型から、総構え型城下町化を

図ったものとされている。正保、寛文、天保などの城下町絵図から知られる高知城下町も、土手と堀川に囲郭された総構え型が基本としてプラン化されていることが理解できる。

これは、中世の社会状況の中で生じた防御的性格を示すとともに、堀川の交通機能性、さらには、近世的身分制社会の城下町的表現、つまり、城下町と郷村、郭中（武家屋敷地区）と上・下町の峻別化等の反映を読みとれよう。

一方、このシンポジウムに即していえば、城下町プランや建設の施行に当たっての治水的要素が問題となろう。

前述したように、近世大名への転身をはかった長宗我部元親は、天正16年正月には、岡豊城から大高坂へ移り、鏡川三角州上に城下町建設を試みている。それに先立って、天正15年秋には、この付近から長宗我部検地が始められ、「川成り」などの記載から河川附替などの状況が散見される。

しかし数年を経ず、元親は長浜城へ移り、城下町建設も中断される。後の文禄・慶長期には、前述の浦戸湾奥の大きな潮留堤や塩走りなどの施設をもち組織的に大規模な干拓地造営を実施した長宗我部ですら、その移転の原因が、治水の困難さを克服できなかった点に求められている。

この大高坂城下町の建設を引きついで山内氏時代の建設状況については『築城記』など若干の文献から明らかにされているが、その進歩の段階的状況や完成年度などについては管見しない。たゞ、二代藩主忠義の代になっても水害に悩まされ、河中から高智へ改称したなどのエピソードからも、工事の難行、城下町建設への歳月を要した点が示唆される。

筆者は、城下町絵図などの検討から、寛文頃がほぼ完成期ではなかったかと考える。正保・慶安・寛文図などから治水面に関連する事項の読図を二、三指摘、列举してみたい⁵⁾。

(1) 自然流路の運河化

三角州では河川は蛇行、分流の傾向をみせる。例えば、現NTTプラザ東側の不整形道路に跡をとどめる逆U字形の堀（これに囲まれた中ノ島が中島町の由来）、廿代町付近で江ノ口川沿い以外に南側にもう一つの堤防があり、それに囲まれた輪中の、小遊水地的場所がある。このほか、升形西側の堀の次第に直線化する過程、江ノ口川の尾土附近での不自然な曲り方など、いずれも旧河道の名残りを示すのではないかを思わせる。現若松町運河は、寛文図でもまだ播磨屋橋の堀と直結貫通をみせない。こうした工事の背景には、文禄、慶長期の干拓地の前進が、助長条件として働いたことも類推される。

(2) 惣曲輪

高知城下町の場合、堤による惣構え化も徹底しており、前述の理想的背景以外、現実には治水対策としての意味合いが重要と考える。また上町五丁目の堤も、郷村

地帯と城下町を限る機能の他、治水面からは、鏡河の扇状地面の乱流に対する意味も大きい。寛文9年図のみにみられる四丁目附近の堤も同様の意味が示唆され、上町建設のおくれをも示唆する。郭中部は、鏡川上流部に対して、三本の堤で守られていたことも読みとれる。前述の廿代町の二重の堤も、江ノ口川直線化による備えとも考えられ、

(3) 霞堤

鏡川南岸郷村側の堤防は、城下町治水のために低くさせられたと一般によく云われる。その真意についてはともかく、支流の合流する箇所では霞堤的に大きく切られており、郷村側へ逆流が流入する構造は、城下町絵図からよく読みとれる。北岸においても、五丁目付近では霞堤となっており、現旭地区の郷村部が遊れ帯となるような構造が示唆される。前述の五丁目の南北堤もそのための意味ももつ。

(4) 郭中の街路の方向性と治水

郭中部の南北街路は現都心部の西半の道路の方向に継承されている。正南北ではなく、北々西―南々西に傾いている。この街路の方向性は、郭中ブロックのプランを示すが、これは何に基づいたものであろうか。

『長宗我部地検帳』によると、この部分には一の坪などの条里地名が残っており、条里地割遺構の存在が推定できる。それを復元してみると図2のようになり、南岸や北郊の郷村部と連続する条里地域の一部ということが分かる。この条里地割の方向と郭中ブロックプランの方向性は近似的で、城下町建設にあたって、この水田区画が利用された可能性がある。

水田は灌漑されるよう配慮されたから、郭中プランも地形（微地形）と矛盾しない。つまり、排水的要素を含むことになるといえよう。

4. むすび

防災史を考える場合、時代を遡る程、資料が欠除する。この点から、土地に刻まれた資料（例えば地名、地割）やそれを記録した絵図資料などの活用も出来るのではないかという観点から若干の例示を試みた。大方の御教示を頂ければ幸いである。

引用文献

- 1) 松本（島田）豊寿，1956. 内湾干拓新田の歴史地理学的研究，地理学評論，29-2.
- 2) 高知市，1957. 高知市総合調査.
- 3) 矢守一彦，1970. 都市プランの研究.
- 4) 大脇保彦，1982. 土佐の条里，高知の研究，2.
- 5) 高知市文化事業団，1988. 図録高知市史.